



今月のことば 平成29年 1月 <No.125>

かっこうの悪い生き方

1月16日（旧暦11月28日）は、浄土真宗のご開山・親鸞聖人のご命日です。

下の絵は、親鸞聖人の33回忌（今からおよそ720年前）にあわせて描かれた『親鸞聖人御絵伝（しんらんしようにんごでん）』の一部。聖人のご往生の場面「洛陽遷化（らくようせんげ）」です。

聖人は晩年、火事で家を焼け出されて弟の寺に居候の身となっていました。その最期を看取ったのも息子や娘、そして数人の門弟だけという、静かなご往生でした。しかしその口からは、最期の一息までお念佛が聞こえてきたといいます。



→
拡大



聖人は幼くして親と別れ、9歳で比叡山に。29歳まで過酷な修行を続けながら道を見いだせず、山を下りて法然聖人の元でお念佛のみ教えを学びました。しかし、35歳のとき念佛弾圧にあい越後へ流罪。罪を赦された後は関東に赴き、家族を養いながら20年にわたる布教活動、60歳を過ぎてから京都に戻り、数多くの著作を遺しました。そして、上記のような静かな最期を迎えるれます。

当時の主な歴史書や仏教書に「親鸞」の名は見当たりません。聖人のご一生は、決して華々しいものではなく、むしろそのご苦労が日の目を見ることの少ない歩みだったともいえます。

『親鸞聖人の魅力～親鸞聖人750回大遠忌記念誌～』より 梯實圓和上のことば

その生活様式をみれば、法然聖人は妻帯されず、持戒堅固（じかいんご）な生涯を送られました。しかし、親鸞聖人は…肉食妻帯をして、**在家人の人と同じところへ自分の身を置き、法然聖人の教えを体を張って、生涯をかけてたしかめていかれます。**

この親鸞聖人の生き方こそ、浄土門の修行だったのですよ。今どちがって、持戒堅固な清僧もいて、人々の尊敬を集めていた八百年前のことです。僧侶でありながら、妻子を伴った破戒僧として、在家人の人々といっしょに生活をしていくということは、まことに**「かっこうの悪い生き方**だったと思います。

ご流罪が解かれたあと、四十二歳のときご家族を伴って関東へおいでになるのですが、その生活様式ゆえに、いろいろと非難も受け、妻子をもつゆえの苦悩も多かったわけです。ある意味で親鸞聖人の生涯というのは、あえて厳しい苦難の道を選んでいらっしゃる、とさえ思ふことがあります。

人間はとかく、かっこうをつけたがります。しかし、いわゆる“世間体”や“プライド”が大切なものを見失わせていることが、いかに多いことでしょうか。親鸞聖人が、「かっこうの悪い」生き方を貫くことができたのは、自分を支えてくれるまちがいないもの（阿弥陀如来・お念佛）に出遭っていたからです。

「かっこうの悪い」生き方を、畏れずに歩みましょう。

慧日山 真光寺

